

一人一人に寄り添うために

松江市立八雲中学校 二年 松本史帆

私が小学生のころ学校に来てない子がいると、「何しとるんだろう？暇じゃないのかな」と私は思っていました。その時の私は、毎日学校に行くのが当たり前で、学校が行きたくない場所になるなんて想像もしていませんでした。でも中学一年生の二学期から、学校に行かなくなりました。そしてその時に初めてその子の気持ちが少しだけ分かるような気がしました。

最初はなんとなく学校に行きたくないなという軽い気持ちでした。けれどそれはだんだんと「怖い」「行けない」という感情に変わっていきました。学校に行くのが怖い。人と話すのが怖い。誰かに何かを言われるのではないかと、毎日のように思っていました。勿論誰かに何かをされたり、言われたわけではありません。ですが自分でもよく分からない不安に、心が押しつぶされそうでした。

ある日親に「今日は学校に行け」と言われ車で学校まで連れて行かれました。私は何も言えずただ車に乗っていました。でも学校に近づくにつれて、どんどん気分が悪くなってしまいました。車から降りて昇降口の前まで来た時、どうしても校内に入ることは出来ませんでした。「怖い」「無理」という気持ちで頭がいっぱいになり、そこからは一人で家まで歩いて帰りました。家までは約四キロありましたが、涙をこらえながら「誰にも会いませんように」と願いながら帰りました。

頭では「行かなきゃ」と分かっていたし、「休んだらもっと勉強が分からなくなる」「さぼりだと思われるかもしれない」という不安も沢山ありました。でもそれ以上に、「教室に入るのが怖い」「人に会うのが怖い」という気持ちが強く、まるで心と頭がバラバラになってしまったような感覚でした。

そんな私でも三学期からは、相談室という教室に少しずつ登校するようになりました。ですがそこでも少し悩みがありました。周りの人は今まで学校に来なかった私をどう思うのだろうか。「今さら来たの」「来れるなら、もっと早く来なよ」と思われているのかもしれない。そんな不安が頭の中をよぎり、常にその事ばかり考えてしまっていました。だから私はできるだけ平常心を装い笑顔でいるようにしました。「元気そうだね」と言われるのではないかと正直とても怖かったです。心の中では不安でいっぱい、涙が出そうになることもありました。でも「心配させたくはない」「親への負担を減らしたい」という思いから、自分に大丈夫だと言い聞かせました。

そんな中である友達に「学校来らんの楽でいいなあ。私も不登校になりたい」と言われたことがあります。その時の私は笑ってごまかしましたが、心の中では悲しさがこみ上げてきました。「確かにそう思う気持ちも凄く分かるよ。でもそんな事言って欲しくなかった。なりたいならなればいいのに。簡単に言わないで欲しいよ」と思ってしまいました。

不登校は楽なものでも自由なものでもありませんでした。心が辛くてどうしてもどうしても行けなくなってしまう状態です。それを、「うらやましい」と軽く言われたことで自分の苦しみが否定されたように感じました。でも私も小学生の時「暇じゃないのかな」と思っていたのでそう思われても仕方がないのかなと思いました。

今私は中学二年生になり学校に行ける日と行けない日があります。学校に行った日は友達と楽しくお話をしています。ですがこの前自分が何をしたいのか分からなくなって泣いてしまいました。

心の辛さは目には見えません。だからこそ周りの理解や思いやりがとても大切だと感じます。私自身も昔は「学校に来ない子＝暇そう」と思っていました。でも今ならその子は暇なのではなく心の中で一生懸命に戦っていたのだと少し分かります。そしてその子の気持ちを理解しようとしなかった私のような存在が、その子をさらに傷つけていたのかもしれない。

この作文を書くことも正直悩みました。でも自分の気持ちを正直に書くことで、誰かの心に届いたら嬉しいと思い書くことにしました。今どこかで悩んでいる人に、「あなたは一人じゃない」と伝えたいです。無理をしなくていい。心の苦しさは誰にでもあることです。

そして私自身も誰かの痛みに気づける人でいたいと思います。少しでもこの世の中に私も含め、一人一人に寄り添える人が増えればもっと優しい社会になると信じてます。そしてどんな人でも楽しい人生を送れる日が来ること、生きやすい世界になることを心から願っています。